

## 「神の国の成長」

2014年08月14日

マルコによる福音書4章26節34節。「また、イエスは言われた。『神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでの実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。』更に、イエスは言われた。『神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。』イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。」

主イエスは「神の国」についてたとえで語られた。神の国とは、神が生きて働き、神の御心が現されている現実である。だから、神の国は嬉しい世界であり、その世界の様子を巧みなたとえで表された。上記の御言葉において、神の国が二つのたとえで語られている。

一つは、作物の成長にたとえている。人は、土に種を蒔く。芽が出て、茎が伸び、穂が実り、鎌を入れ、豊かな収穫が得られる。人は、作物の成長を見るが、どうしてそうなるのかは知らない。もちろん、根から養分を吸い上げ、太陽の光を受けて成長する訳であるが、その生殖の仕組みは知らなかった。友人の山本将信牧師は休耕田を借りて、農作物を大量に作って、自分で食べ、他の人に贈り届けている。彼は、作物の成長は「エキサイティングである（ワクワクする）」と言っている。主イエスは、神の国はそのようなものであると語っておられる。このたとえのポイントは、神の国は神ご自身が成長させるということである。パウロは、コリントー3章6節で「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」と書いている。人は、種を蒔き、水を注ぎ、収穫の手伝いに与るのみである。

もう一つは、神の国が「からし種」にたとえられている。からし種は小さい、ゴマ粒の10分の1くらいであろうか。それが成長すると、黄色いきれいな花を咲かせ、3~5メートルほどに伸びる。主イエスは、神の国は当初、小さいものであるが、成長して葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張ると語っている。前述の作物のたとえと同じように、神ご自身による大きな成長をたとえている。

主イエスの神の国の宣教は、ガリラヤ湖の周辺で、民衆から絶大な支持を集めたが、当時の世界の片隅の出来事であった。十字架の出来事も弟子たちは福音書に書き残したが、一般史においては、ヨセフスが『ユダヤ戦記』に一行書いているだけである。その主イエスの生涯と死と復活が世界の隅々まで伝えられ、クリスチャン人口は20億人を超えている。小さな種は大木に成長した。ここには、先人たちの命をかけた宣教があった。

しかし、教会の権威と権力による、主イエスの福音とは真逆の凄まじい弾圧と迫害の事実もあった。教会は宣教する群れであるが、勢力拡大だけが目的であってはならない。神の国は、神ご自身が働かれて成長していく。人間はその神の働きに参与させていただきだけである。神の恵みは、教会が伝達するが、神からくることを忘れてはならない。